

『源氏物語』浮舟と匂宮の「中空」

——『伊勢物語』二十一一段と「若菜上」巻の紫の上を手がかりにして——

増田高士

〔キーワード ①中空 ②『伊勢物語』二十一一段 ③引用 ④手習 ⑤ひき破る〕

はじめに

『源氏物語』続篇の宇治十帖後半に位置する浮舟物語は、入水譚、出家譚を想起させるのみならず、『竹取物語』や『伊勢物語』からの影響など、様々なテキストからの引用が指摘されている。^{注1}また、浮舟は古注釈以来「手習の君」とも呼ばれており、浮舟の手習は物語において重要な意味をもつ。手習歌を含みそれぞれの和歌については、詳細かつ丹念な分析に基づく論考が多数ある。浮舟の和歌を総合的に扱った論考としては、歌人としての成長過程を論じた藤井「一九八三」や対人性を排除していく独詠歌の位相を論じた高田「二〇〇三」がある。また、手習の「書く」という行為に焦点を当てた論考も多い。外在化という視角から手習を論じた松井「一九八四」や、手習と無意識の表出について考察した吉野「二〇一一」、手習の伝達性を指摘した山田「二〇〇四」など、多角的なアプローチによって

すぐれた分析が積み重ねられてきた。

和歌の分析を微細に行う方法以外に、散文中の歌ことばを考察した論考がある。^{注2}たとえば、「山橋」については井野「二〇一一a」、「引板」については井野「二〇一一b」、「またぶり」については鈴木「一九九六」、「橋」については井上「二〇〇〇」の考察がある。これらの論考は浮舟物語の言葉がいかに重層的に織りなされているのかを示している。本稿ではこれらの先行論に示唆を受けながら、「浮舟」巻で浮舟と匂宮が歌を贈答した場面における「中空」を介したやり取りについて、この歌ことばのもつ意味を探りながら、他のテキストからの引用にも目を配り、従来の解釈とは異なる視座から考察を試みたい。

一 「浮舟」巻の「中空」

「浮舟」巻では、匂宮と浮舟が同じ空間にいて歌を贈答する場面が四つある。その中で手習による贈答は二組である。一つ

目は句宮が浮舟の在り処をつきとめ、自身を薫と偽って宇治の邸に闖入して逢瀬を遂げた後の贈答であるが、本稿で主に考察の対象とするのは句宮の二度目の来訪時における贈答である。句宮は浮舟と水入らずの時間を過ごすために、従者の時方に用意させた隠れ家に浮舟を連れて行き、手習に興じる。

①「峰の雪みぎはの水踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。

降りみだれみぎはに氷る雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

と書き消ちたり。この中空をとがめたまふ。げに憎くも書きてけるかな、とはづかしくてひき破りつ。さらでだに見るかひある御ありさまを、いよいよあはれにいみじと、人の心にしめられむと、尽くしたまふ言の葉、けしき、言はむかたなし。

(浮舟巻⑧五六―五七頁)

句宮は浮舟の心を惹こうと手習する。句宮の歌は「道は迷わず来たのにあなたには迷ってしまふ」という意だが、浮舟も手習で返歌する。「降り乱れて汀に氷る雪よりもはかなく、私は空中途中で消えてしまふでしょう」と。そして自らの手習を「書き消すが、句宮がその「中空」を」とがめる。それに対して浮舟は「げに憎くも書きてけるかな」と紙を「ひき破」ってしまう。

浮舟の歌について、高橋「一九八二」は「根源的な意味での

故郷喪失者としての〈浮舟〉が、自己の存在の位相を直感したことば」であり「浮舟自身の存在感覚」をあらわすと指摘する。また、歌が本人の今後の運命や物語展開を予感させる方法であるという指摘もある。今井「一九八二」は「女が、刻々に近づく死の予感におびえている意」であると指摘する。小町谷「一九九七」は「浮舟の立場と運命を暗示する」歌だと指摘する。当該歌のみならず、浮舟は本文①に先立つ句宮との贈答においても「橘の小鳥の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ」(浮舟巻⑧五三頁)という歌を詠んでいた。句宮との逢瀬を重ねていくにつれて自身の不安定な身の上や儂い運命を暗示させる響きをもつ歌を連続して詠んでいることもあり、これらの先行論は首肯すべき見解であろう。

浮舟の歌の意義もさることながら、本稿でとりわけ問題としたいのは句宮が「中空」をどのように解釈したのか、という点である。浮舟が「中空」の歌を手習して句宮がそれを「とがめ」たとき、浮舟は「げに」という反応を示して、紙を「ひき破」っている。「げに」とは相手の指摘に対して「なるほど」と是認する意であるから、浮舟の意図とは別の解釈が句宮によって提示され、浮舟がそれに気づいて「げに」と納得した可能性が考えられるのである。^{注3}

では、句宮はどのような意で「とがめ」たのであろうか。先行論を確認すると、先の今井論文は句宮が浮舟の不安には気づかず「句宮と薫との間で中ぶらりんでいるとはけしからぬ、とただ皮相に受取つ」たと指摘する。小町谷論文も同様に「浮舟

が薰と自分との間に立って中途半端な気持ちでいると解して答めた」と指摘する。注釈書を確認すると、『新編日本古典文学全集』（小学館）、『新潮日本古典集成』（新潮社）、『新日本古典文学大系』（岩波書店）も同様の解釈をしている。^{注4}

以上を整理すると、浮舟は自身の不安定な身の上を「中空」として歌に詠んだが、匂宮はそれを薰と匂宮の中間で揺れる「中空」だと解釈してとがめた、ということになる。物語展開をふまえれば浮舟が薰と匂宮の間に板挟みになり、その悩みを誰にも打ち明けることなく、外的状況と内面の両方から追い詰められて入水を企てるに至ることは明らかである。しかし、本稿で問題としたいのは、右のように匂宮の「とがめ」が男女の三角関係の悩みを言い当てたものだとする解釈がはたして妥当か、という点である。というのも、作中における「中空」の用例を確認すると、男性二人の間で思い悩む女性の状況や心境を「中空」と表現する用例は見当たらないからである。物語展開をふまえて語の意味を読み取ることを否定する意図はないが、別の解釈が成り立つ可能性を探ってもよい場面であると考えられる。『源氏物語』作中において「中空」がどのような意味を含みもつのかをあらためて検討してみた。

二 『源氏物語』の「中空」

「中空」は小学館『日本国語大辞典』（第二版）によれば、名詞の場合では大別して「空の中ほど。空中。」と「出発点から到着地までの中間をさしている。中途。」の二つの意がある。^{注5}

「中空」は歌ことばであり、用例は和歌に多い。たとえば「初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみものを思ふかな」（『古今集』・巻第十一・恋一・四八一・凡河内躬恒）の「中空」はもの思いをする精神状態の意の「うわの空、放心状態」であると同時に、初雁の縁語として雁の飛ぶ空間をあらわしている。^{注6}

散文作品における用例は少なく、『伊勢物語』、『うつほ物語』、『蜻蛉日記』に各一例確認できるだけであるが、『源氏物語』には「中空」の用例が合計十四例と多い。^{注7}作中人物ごとに整理すると、浮舟が最多の四例、紫の上、明石の君、落葉の宮、夕霧が各二例、玉鬘の大君、薰が各一例となる。これらを大別すると、他の作中人物が当人の置かれた中途半端な身の上を「中空」という場合と、本人が自分のことを「中空」という場合がある。『源氏物語』作中の全用例については原岡「二〇一六」がすでに詳細に検討しており、「中空」が「二つのもの間を揺れる感覚をとりわけ掬い上げる固有の表現」であると指摘している。原岡論文は作中人物の特徴をふまえながら、「中空」とその人物の置かれた状況との響き合いを的確に捉えたすぐれた分析である。全用例の検討は原岡論文に詳しいため本稿では省略し、とりわけ本文①の「中空」に絞って考察していきたい。

匂宮の「中空」の解釈については、原岡論文も他の論考と同様に「薰と匂宮の狭間に揺れる心」と解釈している。しかし、作中の用例を確認すると女が男二人の間で揺れるという意の用例は見出すことができない。原岡論文のいう「二つのもの間を揺れる感覚」を稿者なりに定義すれば、どちらとも付けない

状況とそれに伴うやるせなさや諦めの感情をあらわす語であると考えられる。まず本文①以外の浮舟に関する例二つを確認する。

② 「母君」…「前略」…中空に所狭き御身なり、と思ひ嘆きはべりて」と言ふ。
(浮舟巻⑥八頁)

③ …「前略」…行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強くこの世に失せなむと思ひ立ちしを…「後略」…
(手習巻⑧一八九頁)

本文②・③と本文①の例を合わせて浮舟の例は計四例となる。

②は母君の発言である。浮舟は薫に引き取られることを待つ身であり、「東屋」巻で匂宮に言い寄られた一件があったので中の君のもとに身を寄せることもできない。また、常陸介のいる実家にも戻ることができず、抛り所のない状況を「中空」という。浮舟が薫と匂宮の間で板挟みにある状況を母君は知らないの、それを「中空」ということはありえないだろう。③は浮舟が入水を企てた時の回想である。行き先に迷うが、部屋に戻ることのできない戸惑いの状況を「中空」と表現している。

浮舟以外の女君の例も同様の意で用いられている。紫の上、明石の君、落葉の宮を一例ずつ確認しておきたい。「若紫」巻では、尼君を亡くした紫の上について小納言がその身の上を語った際に、子どもでもなく大人でもない中途半端な年齢を「中空」という。「滯標」巻では、明石の君が住吉詣の際に源氏の一行と鉢合わせ、そこに混じって祈願することも帰ることもできず、やるせなさを味わう心境を「中空」という。「柏木」

巻では、一条御息所が娘の落葉の宮について、独身を貫くことなく夫柏木の死によって結婚生活を続けることもできなくなったことを「中空」だと嘆いている。これらはどちらにも付けない現状とそれに対するやるせなさをあらわしているといえる。

また、「中空」が男女の三角関係の文脈で使用される語ではない、という点も確認しておきたい。たとえば「浮舟」巻において右近の姉が二人の男に求婚された挿話があるが、「これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひまどひてはべりしほどに…」（浮舟巻⑧八〇頁）とあり、「中空」の語の使用はない。浮舟の入水譚の下敷きと指摘されている『大和物語』百四十七段「生田川」も女が男二人に求婚された話だが、「いづれまされりといふべくもあらず。女思ひわづらひぬ」（三六八頁）とあるのみで、「中空」という語は確認できない。

以上をふまえて匂宮の「とがめ」の意味について考えてみたい。「中空」に「どっち付かず」の意を認め、そこに物語の内容を前提として薫と匂宮を当てはめると、匂宮が「とがめ」たのは「浮舟が薫と匂宮のどちらにも付けない」と解釈したことが原因だと考えられる。ただし、それはあくまで薫と匂宮の狭間で苦悩する浮舟という物語の内容を前提とした上で「どっち付かず」の二項目に男性二人をはめ込むだけの解釈でしかない。また、男女の三角関係という文脈で「中空」が使用される例がないことから、「薫と匂宮のどちらにも付かない」という意味を読み取ることが適切か、疑問を挟む余地は残る。

そこで別の視角から考えてみたい。本文①が浮舟と匂宮とい

う恋人間における「中空」のやり取りである点に着目する。男女間のやり取りでこの語が使用される用例がもう一つあり、それが「若菜上」巻における紫の上である。恋人あるいは夫婦の關係にある男女間で女から男へ向けて「中空」が使用されるといふ共通項をもつ作中唯一の例である。次節ではこれを手がかりに「中空」を検討する。

三 「若菜上」巻の「中空」と『伊勢物語』二十一一段引用

「若菜上」巻において、朧月夜との逢瀬の後、朝帰りの源氏に対して紫の上はすぐにそれと察するが気づかないふりをしていゝ。源氏はそつげなく見放されるのがかえつて辛く思われるので、紫の上への深い愛情を強調するように語りかける。

④ いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ち受けて、女君、さばかりならむと心得たまへれど、おほめかしくもてなしておはす。なかなかうちふすべなどしたまへらむよりも、心苦し、などかくしも見放ちたまへらむとおほさるれば、ありしよりけに深き契りのみ、長き世をかけて聞こえたまふ。…〔中略〕…〔源氏〕「物越にはつかかりつる対面なむ、残りあるこちする。いかで人目咎めあるまじくもて隠して、今一たびも」とかたらひきこえたまふ。うち笑ひて、〔紫の上〕「今めかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみたまへるまみの、いとらうたげに見ゆるに、〔源氏〕「かう心やすからぬ御けしきこそ苦

しけれ。ただおいらかに引き抓みなどして教へたまへ。隔てあるべくもならはしきこえぬを、思はずにこそなりにける御心なれ」とて、よろづに御心とりたまふほどに、何ごともえ残したまはずなりぬめり。

（若菜上巻⑤七五—七六頁）

変わらぬ愛を誓おうとする源氏に対して、紫の上は自身を「中空なる身」だという。この「中空」を含む源氏と紫の上のやり取りには神田「二〇二〇」が指摘するように、『伊勢物語』二十一一段（一重傍線部）と三十二段（二重傍線部）の引用がある。次に示すのは二十一一段の本文である。

⑤ むかし、男、女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかなることかありけむ、いささかなることにつけて、世の中を憂しと思ひて、いでていなむと思ひて、かかる歌をなむ、よみて、ものに書きつけける。いでていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

とよみおきて、いでていにけり。…〔中略〕…。またまた、ありしよりけに言ひかはして、男、

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞかなしき

返し、

中空に立ちある雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな

とは言ひけれど、おのが世々になりにければ、うとくなり

にけり。

(二十一)

長い間深く愛し合っていた夫婦がいたが、どういった経緯か、女が出て行ってしまった。男は茫然とするが、その後久しくして再び関係を取り戻し、より深い仲となる。しかし結局は二人とも他に想う相手を得て疎遠になるという物語である。「中空」は女の歌に詠まれており、空の中途にある雲のように、自身のより所のなさや儂い運命をいう。

本文④では、朝帰りの源氏が言い訳がましく愛を誓うときに「ありしよりけに」が引用され、源氏と昔男が重なる。一方、紫の上は「昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」と応える。この「中空」は二十一一段の女の返歌と破線部にある男女の別れの結末をふまえたものであろう。紫の上は自分が儂い運命を迎えるであろうこと、そして源氏との間に横たわる溝が二人の仲を裂いていくであろうことを自身の発言に響かせているのである。

二重傍線部「昔を今に」の『伊勢物語』三十二段の引用についても同様のことがいえる。男が過去に関係を結んだ女に対して懺りを戻したいと思い、「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」と訴えるが、相手にされずに終わる物語である。紫の上は源氏と朧月夜の関係について、昔の恋を今に取り戻して昔以上に熱心な源氏を揶揄しているわけだが、三十二段をふまえることにより、源氏と朧月夜も結局はそのような男女関係に終わるのであろうことが暗示されている。

『源氏物語』第二部の『伊勢物語』引用は、昔男と源氏の距離

をはかりながら、戻らない過去、源氏の古い、紫の上との関係の暗転などを鮮明にしていく方法である。

以上は神田論文の分析に詳しいが、「若菜上」巻の紫の上が『伊勢物語』二十一一段をふまえていることは明白であらう。『源氏物語』において、男女間のやり取りで「中空」という語が使用される場合、それは男女関係の終わりを暗示するのであり、女から男へ向けた批判の響きをもつ語であるといえる。男が女に愛を誓う場面で、女が男へ向けて「中空」を使用する場面は本文①の浮舟と本文④の紫の上の例のみであることから、次節では紫の上の例をふまえながら浮舟と句宮の「中空」に立ち戻って考えてみたい。

四 句宮の「とがめ」と手習を「ひき破」ること

本文①において、愛を誓おうとする句宮の情熱的な歌に対して浮舟は「中空」と手習した。女から男への「中空」、それを受け取った男という点が「若菜上」巻との共通項である。ならば、紫の上が源氏に向けた「中空」のように、句宮も『伊勢物語』二十一一段をふまえた男女関係の終わりを暗示する批判的な言葉として浮舟の「中空」の意を汲みとったのではないだろうか。従来の解釈に示されているような薫と句宮の間で揺れる浮舟の心情と考えるよりも、『伊勢物語』二十一一段の引用と考えるほうが「とがめ」の理由がはつきりとするだろう。句宮は相手の心を惹こうと手習したにもかかわらず浮舟が「中空」を手習したことによって、別れを暗示する言葉として受け取ってし

まったく考えれば、相手の歌を「とがめ」という匂宮の過剰ともいえる反応についても当然のものと考えることができる。

「とがめ」を受けた浮舟についても、男女の別れという、いかにもその場に気詰まりな空気を生む言葉を手習してしまつたことに気づき、そのばつの悪さにいたたまれなくなつて紙を引き破るという大袈裟な反応に至つたと考えられる。そして匂宮は浮舟の心に印象づけられるような言葉を尽くすのにますます必死になるのである。つまり、浮舟と匂宮の「中空」をめぐる一連のやり取りは、『伊勢物語』二十一節を介した「男女の別れ」の意をめぐるやり取りといえるだろう。

そして、そのように考えた場合、それが単なる『伊勢物語』二十一節引用というのではなく、『伊勢物語』の「中空」を介して紫の上の場面が想起されることにもなるわけだが、「中空」を中心に両場面を向かい合わせることでよつてどのような違いが見えてくるだろうか。また、浮舟と匂宮の「中空」をめぐる一連のやり取りには、どのような意味があるのだろうか。

両者の違いについてだが、一つは男女の関係性の違いがある。紫の上と源氏は「若紫」巻以降、長い年月をかけて夫婦関係を築いてきたのであり、『若菜上』巻における紫の上の批判の言葉にはそれだけの重みが伴つて直接的に源氏にぶつけられている。そのため、源氏の方がたじたじになつてしまふ。一方で、匂宮にとつての浮舟はあくまで中の君に劣る存在でしかなく、薫とのライバル関係を前提とした愛人という位置づけである。本文①の直後には「姫宮にこれをたてまつりたらば、いみじき

ものにしたまひてむかし」(浮舟巻⑧五七頁)とあるように、匂宮は浮舟を女房として女一の宮に仕えさせることを考えても

いる。匂宮が「中空」を「とがめ」たとしても、それは紫の上が源氏に突きつけたような重さを伴つて匂宮に響いているわけではなく、なんとかして浮舟の心を魅惑しようという感情に任せた匂宮の戯れの心を浮き彫りにしてしまうのである。

そして、男女関係の差異よりもさらに大きな違いがある。紫の上と源氏のやり取りが会話文であるのに対して、浮舟と匂宮は手習という書かれたものを媒介にしている点である。浮舟は、自身の手習を「書き消ち」ており、匂宮の「とがめ」によつてそれを「ひき破」つている。紫の上とはその点が大きく異なるため、浮舟の手習の問題として考えてみたい。

まず本文①の「書き消ち」について検討する。『源氏物語』作中には用例が確認できないため意味が確定しがたいのであるが、『蜻蛉日記』に「書き消ち」という音便形の用例が一例ある。

⑥ 返りことは、「昨日かへりにこそはべりけめ。なにか、

さまではとあやしく、
かげにしもなどかなるらむうの花の枝にしはぬ心と
ぞ聞く」

とて、上書き消ちて、端に、「かたはなるこちしはべりや」と書いたり。

〔蜻蛉日記〕 下巻三五〇頁

右の歌は『蜻蛉日記』の作者が自分の娘に求婚する速度へ贈つた歌である。この歌が速度に対して同情的に過ぎると考えて上から「書き消ち」て、その端に別の文言を書きつけたのである。

別の紙に書き直さなかったことを考えると、これは書き消した箇所をあえて強調する表現上の効果であるとも考えられる。浮舟の場合、意図的かどうかは不明だが、「中空」を「書き消したことが結果的に「中空」を強調するような結果となつてしまったのではないか。そのため、よりいつそう匂宮が「中空」を意識したのであろう。それゆえの「とがめ」であり、責任を引き受けるかのように浮舟は、手習を「ひき破」るしかないのであった。本文①は「若菜上」巻の「中空」をふまえながらも、会話文ではなく手習を介したやり取りとして、女の側に「中空」という語の責任を負わせているといえる。これを「手習の君」浮舟のあり方と密接に結びついた場面と考えてみたい。

「浮舟」巻における浮舟には、手習を人に見せることを憚つて最終的に処分してしまうという特徴がある。たとえば、本文①の後の物語展開を辿ると、薫と匂宮から歌が贈られてきた際に「今日はえ聞こゆまじ」と、はぢらひて」（浮舟巻⑧六二頁）手習をしている。人に見せるための返歌はできずに、誰かに見せるわけでもない手習をするのである。さらに、入水を決意した後は「むつかしき反古など破りて、おどろおどろしく一度にもしたためず、燈台の火に焼き、水に投げ入れさせ」（浮舟巻⑧八六頁）、手習を処分している。そして浮舟は苦悩や葛藤を胸の内に秘めたまま、自身の処分をも試みて消息を断つことになるが、手習が浮舟自身のあり方とパラレルな対応関係となつているのである。

そのような物語展開の始発場面として本文①を位置付けたい。

浮舟が手習を人に見せることを憚るようになったのは、手習が意図しない匂宮の「とがめ」を受けてしまったことが一つのきっかけとなつていのではないだろうか。手習しても自分の意思が明確に相手に伝わるとは限らない。むしろ書くことによつてあらぬ解釈を受けることの危険を実感した場面でもあるといえよう。^{注10}

第一節において、浮舟の「中空」の歌が浮舟自身の運命を暗示する物語の方法となつていことを確認したが、歌のみならず手習という視角から考えた場合も同様の見方ができるだろう。紫の上の例のように女から男への批判の言葉としてあるはずの「中空」が、浮舟の場面では逆に浮舟自身がその言葉の責任を問われている。手習さえも他人のあらぬ解釈を受けてしまうことがあり、だからこそ他人にはなるべく書いたものを見せないし、何も話さない。本文①の場面はそのようにして内面にわだかまっていく苦悩が限界に達するまでの浮舟のあり方を方向づけているとも考えられるのであり、最終的に入水を企てるまでの浮舟の軌跡が素描された場面として位置付けることができるだろう。

おわりに

「浮舟」巻における浮舟と匂宮の「中空」をめぐるやり取りについて、とくに匂宮の「とがめ」の原因をどのように考えるべきか、従来の解釈とは異なる視角から検討した。恋人あるいは夫婦の関係にある男女間で女から男へ向けて「中空」が使用

されるといふ共通項を手がかりに、『伊勢物語』二十一一段とそれを引用した「若菜上」巻の紫の上を検討した上で、匂宮の「とがめ」が『伊勢物語』二十一一段をふまえた男女関係の破局の意をめぐってのものであったことを考察した。また、単なる『伊勢物語』二十一一段引用の問題にとどまらず、「若菜上」巻の「中空」と浮舟のそれとを比較することによって、浮舟の場面は手習を介したやり取りであること、そして匂宮にそれが読まれることが問題となっている点についても考察した。紫の上とは異なり、女の側である浮舟が「中空」という言葉の責任を引き受けさせられているのであり、そこに手習の問題が被せられているのである。当該場面を位置付けるとすれば、手習を他者に見せずに処分してしまうこと、内面の苦悩を誰にも打ち明けずに蓄積していくこと、そして入水の決断に至るといふ浮舟自身の運命を方向づけていく一つのきつかけを与える重要な場面と考えることができる。

浮舟について考えていくときに手習の意味は重いが、本稿では匂宮と浮舟の贈答に限って検討したため、「浮舟」巻あるいは浮舟物語全体の手習について総合的かつ詳細な検討を行うことができなかった。今後の課題としたい。

注

1 本稿で主に考察する『伊勢物語』引用について詳しく論

じたものに小林「二九九八」、久富木原「二〇〇九」、竹

田「二〇一八」、竹田「二〇二〇」がある。

2 「歌ことば」については小町谷「一九八四」の「和歌・引歌・歌語など和歌的なものを一切含んだ和歌言語」という定義を基準とした。

3 大久保「二〇〇七」も浮舟と匂宮の解釈に「げに」の前後で違いがあると指摘する。

4 他の見解として、たとえば『岷江入楚』（中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第九巻』武蔵野書院 二〇〇〇年）は私注で「匂の心はかくれかなと求めて我方へおとしつけたるにかく云をとかめ給ふ也」とする。とがめの原因が男女の贈答にふさわしくない点にあるという解釈である。

5 形容動詞の場合は、「どつちつかずで中途半端なさま。途中でやめてしまつて、中途半端なさま。」「精神の不安定なさま。落ち着かないさま。うわのそら。」「いい加減なさま。なまはんかなさま。」の三つの意と大別される。本稿では形容動詞の是非や名詞と形容動詞の区別は問わず、「中空」を含む語として一括して扱うこととする。

6 他の用例として『和泉式部集』では「人はゆききりはまがきに立ちとまりさも中空に詠めつるかな」（一八二番）、「かきくもる中空にのみ降る雪はひとめも草もかれがれにして」（七二二番）がある。一八二は「人は帰つてしまつた／霧は逆にとどまつて晴れてくれない」、七二二は「人目も離れ／草も枯れ」てしまつたの意となる。こ

これらの例では、疎外されたような状況とやり場のない感情を表現する語として使用されている。

7 用例数は『新潮日本古典集成』（新潮社）の本文を稿者が確認し、集計した。補助的に『源氏物語大成 索引篇』（中央公論社）、『新日本古典文学大系別巻 源氏物語索引』（岩波書店）を用いた。また、原岡「二〇一六」も「中空」の用例数が十四と数えている。

8 「中空」が男女関係の破綻を暗示する用例は、『源氏物語』に先立って『蜻蛉日記』中巻の天禄二年七月の記述がある。登子からの贈歌「妹背川むかしながらのなかならば人のゆききの影は見てまし」（二五六頁）に対して、道綱母は山籠と出家を完遂できずに夫によって京に引き戻された身の上について「山の住まひは秋のけしきも見たまへむとせしに、また憂き時のやすらひにて、中空になむ」（同）と語っている。『新編日本古典文学全集』（小学館）、『新潮日本古典集成』（新潮社）はこの「中空」に『伊勢物語』二十一一段の引用を指摘する。登子の贈歌が道綱母と夫との仲に言及したものであることから、道綱母の「中空」が中途半端な身の上をあらわすとともに、夫婦仲の破綻の意をふまえたものと考えられる。「若菜上」巻が『蜻蛉日記』をふまえたかは定かではないが、『伊勢物語』二十一一段の男女の結末をふまえて「中空」を引用する例として重要であろう。

9 浮舟が匂宮に最後に送った歌にも、『伊勢』二十一一段引

用と考えられる箇所がある。浮舟歌「からをだに憂き世の中にとどめずはいづこをはかと君もうらみむ」（浮舟巻⑧九四頁）である。「いづこをはか」が、二十一一段で男が女を探し求める際の表現と一致する。また、これを読んだ匂宮の反応は「あだなる心なりとのみ、深く疑ひたれば、ほかへ行き隠れむとにやあらむ」（蜻蛉巻⑧一〇三頁）とあり、二十一一段の男女関係の文脈で解釈していると考えられる。浮舟が意図して二十一一段を引用したかのは定かではないが、浮舟歌は自死を決意して詠まれた歌であり、ここには二十一一段の文脈でしか解釈しない匂宮と、その枠を越えていく浮舟という違いを読み取ることができよう。

10 宗雪「二〇〇二」は浮舟が匂宮から手習を習うことによつて習慣化していったと指摘する。

※『源氏物語』の本文は新潮日本古典集成（新潮社）により、巻名、冊数、頁数を付した。

※『源氏物語』以外の主要作品の引用本文は以下のとおりである。適宜、表記を改め、傍線等を付した箇所がある。

『古今和歌集』……高田祐彦（訳注）『新版 古今和歌集』

〈角川ソフィア文庫〉角川学芸出版 二〇〇九年

『伊勢物語』……石田穰二（訳注）『新版 伊勢物語』〈角

川ソフィア文庫〉角川学芸出版 一九七九年

『大和物語』……片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好

子（校注・訳）『新編日本古典文学全集12 竹取物語
伊勢物語 大和物語 平中物語 小学館 一九九四年

『蜻蛉日記』……菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久（校注・
訳）『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』
小学館 一九九五年

※『古今和歌集』以外の和歌は原則として『新編国歌大観』
（角川書店 一九八三―一九九二年）に拠ることとし、
適宜表記を改めた。

引用文献

井上真弓「二〇〇〇」 「橋の小島のさきにちぎる心は―過去
の照らし未来を誘う「橋」の表象」『国文学 解釈と教
材の研究』四五―九 學燈社 二〇〇〇年七月

井野葉子「二〇一―a」「浮舟の山橋―歌ことばの喚起する
もの（一）」「源氏物語 宇治の言の葉」Ⅲ―第十一章
森話社 ↑初出は二〇〇二年

井野葉子「二〇一―b」「手習巻の引板―歌ことばの喚起す
るもの（二）」「源氏物語 宇治の言の葉」Ⅲ―第十二章
森話社 ↑初出は二〇〇八年八月

今井源衛「一九八二」「浮舟の造型―夕顔・かぐや姫の面影
をめぐる―」『文学』五〇―七 岩波書店 一九八二
年七月

大久保弦「二〇〇七」「浮舟の人物像について―手習巻の浮
舟歌解釈を中心に―」『福井工業高等専門学校研究紀要

人文・社会科学』四一 福井工業高等専門学校 二〇〇
七年十一月

神田龍身「二〇二〇」「もう一つの『伊勢物語』引用』『平安
朝物語文学とは何か『竹取』『源氏』『狭衣』とエクリ
チュール』ミネルヴァ書房 二〇二〇年

久富木原玲「二〇〇九」「浮舟の和歌―伊勢物語の喚起する
もの」池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子編『源氏物語
の歌と人物』翰林書房

小林正明「一九九八」「最後の浮舟―手習巻のテキスト相互
連関性―」松井健児編『日本文学研究論文集6 源氏
物語Ⅰ』若草書房 ↑初出は一九八六年

小町谷照彦「一九八四」「あどがき」『源氏物語の歌ことば表
現』東京大学出版会

小町谷照彦「一九九七」「手習の君浮舟」『王朝文学の歌こと
ば表現』若草書房 ↑初出は一九九三年一月

鈴木裕子「一九九六」「浮舟の和歌について―初期の贈答歌
二首の再検討―」『中古文学』五七 一九九六年五月

高田祐彦「二〇〇三」「浮舟物語と和歌」『源氏物語の文学史』
東京大学出版会 二〇〇三年 ↑初出は一九八六年四月

高橋亨「一九八二」「存在感覚の思想―（浮舟）について」『源
氏物語の対位法』東京大学出版会 ↑初出は一九七五年
十一月

大学大学院人文科学研究科 二〇一八年十月

竹田由花子「二〇二〇」「浮舟物語と『伊勢物語』の「川」」

『古代文学研究 第二次』二九 古代文学研究会 二〇二〇年十月

原岡文子「二〇一六」「感覚をとらえることば——「中空」、浮

舟の物語——助川幸逸郎「他」編『新時代への源氏学5
構築される社会・ゆらぐ言葉』竹林舎 二〇一五年

藤井貞和「二九八三」「物語における和歌——『源氏物語』浮
舟の作歌をめぐり——『国語と国文学』六〇—五 東京
大学国語国文学会 一九八三年五月

松井健児「二九八四」「浮舟再生物語における独詠歌の位置」
『日本文学論究』四三 國學院大学文学会 一九八四年
一月

宗雪修三「二〇〇二」「浮舟巻の歌の構造」『源氏物語歌織物』
世界思想社 ↑初出は一九八五年七月

山田利博「二〇〇四」「手習巻・浮舟の手習歌」『源氏物語の
構造研究』第三章第二節 新典社 二〇〇四年 ↑初出
は一九八八年十二月

吉野瑞恵「二〇一一」「浮舟と手習——存在とことば——」『王朝
文学の生成 『源氏物語』の発想・「日記文学」の形態』
笠間書院 二〇一一年 ↑初出は一九八七年七月

(ますだ・たかし 博士後期課程)